哲學研究　第四百四十號

聖トマスに於けるesseとexistereについて（承前）

——existereの意味の探究・第四、トマスの用法（二）——

山田　晶

二七

第三に、エクシステレの「あらわれる」の意味について考察する。——我々はこれまでこの語の「—から出てくる」の意味をしらべてきたのであるが「—から出てくる」とは常に「どこからか—どこかへ」出てくることであつて、「どこかに」という終端を前提し、この終端に到達した時に「—から出てくる」はたらきは完全に現實的となる。故にこの終端は「から出てくる」はたらきの現實面である。そこでこの現實面から「から出てくる」はたらきを眺めると、それはこの現實面に何ものかが「あらわれる」ことに外ならぬ。故にエクシステレのこの部類に屬する意味には、このはたらきの現實性ないし現在性の意味が強く浮き出して居る。さてこの意味の群についても我々は先例の如く、㈠　エックスの意味がシステレの意味より強い場合　㈡　システレの意味がエックスの意味と同等に強くあらわれる場合　㈢　エックスの意味が弱まりシステレの意味が殘る場合　㈣　エックスもシステレもどちらの意味も弱まり一般化する場合、を一應區分することができる。以下順次にトマスの用例をあげて説明する。

まづ　㈠　エックスの方がシステレより強い意味をもつて居る場合を考察しよう。この場合エクシステレは「あらわれる」「出現する」などと譯される。

（a）この用例は、トマスのうちにはごく少數で、しかもその大部分は他書からの引用である。故にトマス固有の用法ということはできない。然し少くとも引用されて居る以上、エクシステレのこの意味としてトマスによつて理解されて居たということは確實であるから、やはりトマスに於けるこの語の用例のうちに數えてよいと思う。神學大全第一部四三論題七項異論解答二に、「その鳩と火〔聖靈のすがた〕とは・・・突然エクシステレした」[一]云々。また同所に、「それらの物體的なかたちがエクシステレしたのは、何かを示さんが爲であつた」[二]云々。これらはアウグスチヌス三位一體論からの引用である。また同書第五一論題三項異論解答六に、「シルバヌスやファウヌスは、しばしば女たちのもとにエクシステレした」[三]云々。これもアウグスチヌス神國論からの引用である。――さて前者は、聖靈が鳩の形、火の形をとつて人々の前に「あらわれた」こと、後者はシルバヌスやファウヌスなどという妖魔が、女たちを誘惑する爲に「あらわれた」ことを述べて居る。トマス自身の用例としては、同書第三部三九論題六項異論解答二に、「ところでその鳩は、たゞそのことを示さんが爲にのみ突然エクシステレし、然る後消去つた」[四]云々。內容的には第一例と全く同じである。要するに文字通り「あらわれる」ことを示す例はトマスのうちにあることはあるがごく少い。

（一）I q. 43, a. 7, ad 2. Sed illa columba et ignis ad haec tantum significanda repente extiterunt. 英譯第一卷 appeared (p. 224) 獨譯第三卷 waren plötzlich da (s. 334) 佛譯第一卷 ont reçu l'être (p. 213)

（二）I q. 43, a. 7, ad 2. ad hoc enim rerum illarum corporis extitit species, ut aliquid significat. cf AUGUSTINUS, II De trin, c. 6. (PL 42. 852)

（三）I q. 51, a. 3, ad 6. Silvanos et Faunos, quos vulgus incubos vocat, improbos saepe extitisse mulieribus, et earum expetisse atque peregisse concubitum. cf. AUGUSTINUS, XV De Civ. Dei. c. 8 (PL 42. 876), c. 9 (PL 42. 878)

――デフェラリはこの引用文に於ける extitisse は exstare の完了不定法形であると考えて、この用例を exstare (existere に非ず) の項目のうちにあげて居る (p. 404)。然し一般ラテン辭典によれば exstare には完了形が缺けて居る。（ルイス・

七〇四頁。メンゲ・二八一頁。キシュラー・五一八頁。尤もキシュラーは exsto の完了形として exstiti をあげて居るが、その用例の解説のうちに、「この完了は existo から由來するものでもありうる」(ce parfait peut venir aussi de existo) とことわつて居る。要するにキシュラーに於ては、この語に完了形を附してよいか否かは疑問的に保留されて居る)。故にこれはエクスターレよりむしろエクシステレの完了不定法形ととるべきである。デフエラリがこの用例をエクシステレでなくエクスターレの項目に入れたのは、トマスに於けるエクシステレの意味は、エツセンチアに對應する esse in actu であり、たゞその意味でしかあり得ない、という彼の先入見にもとづくものであろう。デフエラリ説については、本論文第一〇—一五章・哲研四三七號に説明批判した。またエクシステレとエクスターレの相違については、第二〇章註(五)・哲研四三八號五六頁參照。

(四) III. q. 39, a. 6, ad 2. illa autem columba ad hoc tantum significandum repente extitit et postea cessavit,...

(b) それではエクシステレは、それが「あらわれる」を意味する場合には、純然たる「あらわれ」を示す動詞アパレレ (apparere) と、全く同義であるとみてよいであろうか。我々はさきに、實在的存在を示すエクシステレの意味について論じた時、假象的あらわれに對立的に用いられるエクシステレの用法を考察した。たとえば「見かけだけで實在しない善 (apparens bonum et non existens)」とか、「見かけだけで實在しない智慧 (apparens sapientia, non existens)」[五] 等。これらの場合エクシステレは、明にアパレレに對立する意味で用いられて居る。然るに只今考察された諸例に於ては、エクシステレはアパレレと同義となるのであるか。とすればエクシステレは時によつて全く反對の意味をとると解してよいであろうか。——この疑問に對して我々は次のように答えよう。たしかにエクシステレは、時には「あらわれる」の意味となる。然し純然たる「あらわれ」を示すアパレレとは、やはり多少意味が異るようである。その相違は次の點にある。すなわちアパレレは、たゞ「あらわれる」とか「見える」ことだけを示す。すなわちそのもの自體の實在的な「あるなし」にかかわりなく、ともかく主觀に對して「あらわれ」て居ることだけを示す。ところがエクシステレが「あらわれる」の意味に用いられる時、たしかにそれは、それに對して「あら

われる」主觀に對する關係を含んで居る。然し單にそれだけではない。エクシステレするもののシステレする性格は、多少なりともこの語の意味のうちに含まれて居る。故にアパレレするものは、全く見かけだけで幻影的虚無的であり得るが、エクシステレするものは幻影のみではあり得ない。すなわち、アパレレするものは單にアパレレ（あらわれる）するだけでエクシステレ（實在）しないこともあり得るが、エクシステレするものは單にエクシステレ（あらわれる）するだけでなく、また何らかの意味でエクシステレ（實在）するものでなければならぬ。――ではエクシステレ（實在）するとは何か。それは何らかの自立性をもち、またその自立性にともなう何らかのはたらきをもつてあることである。たとえば火や鳩の形をとつて「あらわれる」ものは、單なるまぼろしではなくて可視的な仕方で派遣された實在する聖靈であり、それは信者の心のうちに大なるはたらきをひきおこす。また夜中に婦人たちの寢室に「あらわれる」シルヴァヌスやファウヌスも、單なるまぼろしではなくて實在する魑魅魍魎のたぐいであり、何らかの實在的なはたらきかけを以て、彼女等を誘惑しようとこゝろみるのである。このようにエクシステレは、「あらわれる」の意味で用いられる場合であつても、なお單にそれだけでなく、「あらわれて存在して居る」ことを示し、また「あらわれてはたらいて居る」ことを示して居る。すなわちエクシステレが「あらわれる」の意味になる場合は、エックスの意味が強く、これに比してシステレの意味は微弱であるが、然し全然消失したのではなく、なお何らかの意味で殘存し、潜勢的な意味としてエクシステレの「あらわれる」の意味を背後から牽制して居るのである。(六) そしてこのシステレの意味が表面にあらわれてきて、エクシステレの意味を現實的に支配するようになると、次の(二)の意味に移行する。

（五）エクシステレとアパレレとの對立關係については、本論文第五章(d)項・哲研四三六號二五―二六頁・特に同章の註(八)―(一〇)の用例參照。

（六）この「あらわれる」の意味になる場合のエクシステレとアパレレとの關係は、さきに述べられたところの「から出てくる」

意味でのエクシステレとプロチエーデレとの關係に似て居る。すなわちプロチエーデレは單に「―から出てくる」というだけのことを示すが、エクシステレの方は「―から出てくる」とともにその「でてきたもの」の自立性を多少なりとも含んで居る。その自立性の意味が弱まるとエクシステレの意味はいわば無限にプロチエーデレの意味に近づくが、システレが附加されて居る以上エクシステレが全くプロチエーデレと同義語になることはない。アパレレは「あらわれる」、これに對してエクシステレは「出現する」とでも譯したら、この語の含むシステレの意味が示され得るであろう。プロチエーデレとエクシステレとの關係については、本論文第二五章・哲研四三九號五二頁參照。

二八

次に　(二)　システレがエックスと同等に強くエクシステレの意味の表面にあらわれて居る場合を考察しよう。この時エクシステレは、單に「あらわれる」ことではなく、どこ「からか―現實世界に―あらわれてきて―そこで―現實にはたらいて居る」の意味を含むことになる。かゝる意味を含むエクシステレの例として次例を見よ。――神學大全第一部八論題は、「諸事物に於けるエクシステンチアについて」と標題づけられて居る。(一) このエクシステンチアの意味は注意を要する。神のエクシステンチアときけば、通常人は「神の存在」と解し、恐らくここでトマスは神の存在問題を論じて居ると推察するであろう。ところが實際は、いわゆる神の存在問題が取扱われるのは別の論題であつて、(二) こゝで問題とされて居るのは神があるかないかのことではなく、神が諸事物のうちにいかなる「ありかた」をもつて「ある」か、ということである。而して諸事物のうちに於ける神の「ありかた」が一括して標題のエクシステンチアなる語のうちに含まれて居る。從つてこの場合のエクシステンチアの意味を理解する爲には、神はいかなる「ありかた」をもつて諸事物のうちに「ある」かを知らねばならぬ。

第一に、神はすべての事物のうちに內在する。然し神は事物の本質の部分ないし附帶性として事物のうちにあるのではなく、まさにはたらくものが、それが直接にはたらきかけるもののうちにある、といわれる意味に於て內在す

る。その理由は次の如くである。神はその本質によつて「ある」(esse)が、神以外のものはすべて神から各自の「ある」を受ける。ところで本質的に「ある」ものは分有的に「ある」ものの原因である。故に萬物は神によつて「あら」しめられることによつて「あり」始め、また「あら」しめられて居る限りに於て「ある」。從つて諸事物が何らかの意味で「ある」限り、そこには必ず「あら」しめる神のはたらきがなければならぬ。ところで諸事物にとつて「ある」ということは、それらのものにとつて最も内奥的なる、かつ最も現實的なることである。なぜならばいかなるものも、まづ以て「ある」のでなければいかなるもので「ある」ことも不可能であろうから。從つて萬物の「ある」ことの第一原因たる神は、あらゆる事物のうちに、その最も内奥に於て、それを「あら」しめて居る根源的なはたらきによつて直接的接觸の仕方で内在して居るのである。これが諸事物に於ける神の内在である。(三)——第二に、神は遍在する。というわけは、神は萬物のうちに、それらの「ある」ことの原因として内在する如く、またあらゆる場所に、それらの場所が場所として「ある」ことの原因としてある。しかも神は物體が或場所にあるといわれるような仕方で場所に「ある」のではない。或物體が或場所を占めると、他の物體は同時にその同じ場所にあることができない。これが凡そ物體的諸事物の場所に於けるあり方である。ところが神が或場所を占めたが故に他の物體はその場所に居れなくなる、ということはない。却つて神は物體を、場所に「ある」ものとして「あら」しめるという、まさにそのはたらきによつてその場所に「ある」。從つて神は萬物にあらゆる場所を占有させながら、しかもあらゆる場所に「ある」。これが神の遍在である。(四)——第三に、神はあらゆる場所に、本質的、現在的、能力的に「ある」。すなわち萬物は神に「あら」しめられることによつて「あり」、かつ「ある」ことは事物にとつて最も根本的な存在根據であるから、萬物はその最も根本的な存在根據に於て「あら」しめる神の權能に依據して居る。この意味で神は能力的に萬物に遍在する。同じく萬物は、あらゆる意味でそのものの「ある」ことを神に負うて居るのであるから、神の前に萬物はその「ある」がまゝなる姿に於てあらわである。この意味で神は萬物に現在的である。また神は萬物にその「ある」こ

との原因として現存する限りに於て本質的に遍在する。(五)

以上が第八論題に於て論ぜられて居る神の諸事物に於ける「ありかた」である。すなわち神は萬物のうちに、萬物を根源的に「あら」しめる原因として、その「あら」しめるはたらきに於て、遍在的・能力的・本質的・現在的に現存して居る。而して神のエクシステンチアとは、神の諸事物に於けるかくの如き「ありかた」を名づける。ところで今この神の「ありかた」を、神がそこにあるといわれる被造物の現實的世界の側から考察すると、次のようにいうことができる。すなわち神はその永遠的世界から時間的現實的世界に「はたらき」かけ、その「はたらき」によつて萬物に「現存し」、現存することによつて我々に「あらわれて居る」。もしこのようにいうことが許されるとすれば、こゝでトマスが特に神のありかたについてエクシステンチアという語を用いて居ることは意味深い。すなわちそれは、神が永遠「から」現實的時間的世界に「あらわれて—そこに現存して—そこにはたらいて居る」ことを示すからである。故にこの場合のエクシステレは、そのエックスとシステレとの意味を完全に發揮して居るということができる。

(一) QUAESTIO VIII. De Existentia Dei in rebus. 人或はいうかも知れぬ。標題は後人の附したものである。故に標題にあるエクシステレの用例を以て、トマスの用法と解して考察をすゝめるのは不適當である、と。——これに對して我々は答える。なるほどこの標題はトマス自身によつてつけられたものではない。然しながら Existentia Dei in rebus はやはりトマスの用法である。というわけは、トマスは同書第七論題の序文 (Prologus) に於て次のようにいつて居る。post consideration diviae perfectionis, considerandum est de eius infinitate, et de existentia eius in rebus; ‥‥「神の完全性の考察の後に、神の無限性および神の諸事物に於けるエクシステンチアについて考察さるべきである」云々。而してこの序文に從つて、第七論題では神の無限性について論ぜられ、第八論題に於ては神のエクシステンチアの問題が論ぜられるのである。ところでこの序文が、トマス自身によつて書かれたものであることは確實である。故に標題はたとい後世の附加であるにしても、その附加はこの場合はトマス自身の言葉に從つてなされたものであるから、從つてこの場合のエクシステンチアをトマス自身の用例として論ずることは許される。

(二) いわゆる神の存在問題が論ぜられるのは第一部第二論題である。そこでは「神について、神はあるか」(QUAESTIO II, De

Deo, an Deus sit) と標題づけられ、「神はエクシステレするか」とはいわれて居ない。またこの論題の三つの項のうちに、神についてエクシステレという語は一つも用いられて居ない。(たゞし第一項異論一に於けるダマスケースからの引用文のうちにエクシステレなる語が認められるが、これは引用であるから例外である。De Fide Orth. Lib. I, c. I (PG. 94, 789) omnibus cognitio existendi Deum naturaliter est inserta.) このように神の存在論證のうちにエクシステレという語が用いられて居ないことは注目に値する。それはジルソンが解するように、トマスがこの語の現在用いられて居る意味を知らなかつたからではなくて、却つてエッセと區別されたエクシステレの獨自な意味を心得て居たからであると我々は解する。現代語譯にはこの點に留意して居るものもあるが、また留意せずにエクシステンスという語を以て譯して居るものもある。英譯第一卷 The Existence of God (p. 11). 獨譯第一卷 Gottes Dasein (s. 35) 佛譯第一卷 Dieu, Existe-t-il? (p. 39) セルチランジェ佛譯 De Dieu, Dieu-est-il? (p. 64).

(三) I q. 8, a. 1. Deus est in omnibus rebus,....sicut agens adest ei in quod agit. Oportet enim omne agens coniungi ei in quod immediate agit, et sua virtute illud contingere;....Cum autem Deus sit ipsum esse per suam essentiam, oportet quod esse creatum sit proprius effectus eius;.... Hunc autem effectum causat Deus in rebus, non solum quando primo esse incipiunt, sed quandiu in esse conservantur,....Quamdiu igitur res habet esse, tandiu oportet quod Deus adsit ei, secundum modum quod esse habet. Esse autem est illud quod est magis intimum cuilibet, et quod profundius omnibus inest, cum sit formale respectu omnium quae in re sunt. ....Unde oportet quod Deus sit in omnibus rebus, et intime. ジルソンはこの場合のエッセをすべてエクシステレと解して次のように譯して居る。 Le Thomisme, p. 58. L'exister est ce qu'il y a de plus intime en chaque chose et ce qu'il y a en toutes de plus profond, puisqu'il est comme une forme à l'égard de tout ce qu'il y a dans la chose. 然しながら我々の見解によれば、こゝでトマスがエッセといつてエクシステレといわないこと、しかもその標題に於てエクシステンチアという語を用いて居ることは、まさしくエッセとエクシステレは區別されねばならぬ、ことの一つの有力な證據を提供すると思われる。この點に關しては後に詳論する。

(四) I. q. 8, a. 2. Deus est in omni loco, quod est esse ubique. Primo quidem, sic est in omnibus rebus ut dans eis esse et virtutem et operationem; sic enim esse in omni loco ut dans ei esse et virtutem locativam.... Non sicut corpus;....per hoc quod Deus est in aliquo loco, non excluditur quin alia sint ibi, imo per hoc

replet omnia loca, quod dat esse omnibus locatis, quae replent omnia loca.

(五) I. q. 8, a. 3. Sic ergo est in omnibus per potentiam, inquantum omnia eius potestati subduntur. Est per praesentiam in omnibus, inquantum omnia nuda sunt et aperta oculis eius. Est in omnibus per essentiam, inquantum adest omnibus ut causa essendi.

二九

次に (三) エックスの意味が背後に退き、システレの意味が表面に浮び出る場合を考察する。——この時エクシステレは、「—からあらわれて—現存して居る」の意味から「—から」が消えて、專らその現在性が强調され、その結果「こゝに現に存在して居る」とか「—のてもとにある」(vorhanden Sein) の意味になる。かゝる意味でのエクシステレは、「—のてもとに」というその主體を示す語を與格形にしてともなうか、或は「現在的に」(praesentialiter) とか「現在に於て」(in praesenti) などという現在性表示の副詞や副詞節をともなう。以下にその各々の場合を例示する。

(a) 與格を伴う例。——ニコマコス倫理學註解第九卷十講に、「或人々は、幸福者は自足して居るから友人は不要であるという。というわけは、自分自身諸々の善を十分に所有して居る人々は——そういう人々にはすべての善がエクシステレして居るから (cum omnia bona ipsis existant)——他のものは何も不必要だと思われるからである」[一] 云々。この場合のエクシステレは、すべての善がその人々「に現在的にある」、つまり「てもとにある」、更にくだいていえば、「所有されて居る」ことを意味する。

(b) 「現在的に」(praesentialiter) という副詞を伴う場合。コリント前書註解第十三章に、「壁のうちに見られる白さ、その白さ自體が眼のうちに現在的にエクシステレするわけではないが」[二] 云々。

(c) 「現在に於て」(in praesenti) という副詞節を伴う場合。——ニコマコス倫理學註解第一卷十六講に「こ

れらのものがそのもとに現在エクシステレし（quibus in praesenti existent）、また未來にもエクシステレするであろうような人々、彼等を我々は現世で幸福な人々と呼ぼう[三]」云々。

（d）また次例に於けるエクシステンチアは、その意味よりして明に現在性を示す。すなわち對異教徒大全第一巻六七章に、神は萬物を永遠の現在に於て認識することを述べて、「神の知のうちにはいかなる未來的なものもない。神の知は永遠の瞬間にあるものであつて、萬物に對して現在的に（praesentialiter）關つて居る。....それは存在しないもの（non existens）としてではなく、まさにそのエクシステンチアに於て（in sua existentia）既に見られて居るものとして、神によつて認識される[四]」云々。

（一）In IX Eth Nic. l. 10, n. 1886. Cum enim omnia bona ipsis existant, habentes per se bonorum sufficientiam, nullo modo videntur indigere.

（二）In I Ad Cor. c. 13, n. 800. albedo quae est in parietе videtur, non existente ipsa albedine praesentialiter in oculo, sed eius similitudine,....

（三）In I Eth. Nic. l. 16. n. 201. Et si ita est,....illos de numero viventium beatos dicemus in hac vita, quibus existunt in praesenti, et existent in futuro ea quae dicta sunt.

（四）I Gent. c. 67. Non autem est futurum respectu divinae scientiae, quae, in momento aeternitatis existens, ad omnia praesentialiter se habet. Respectu cuius,.... non est dicere hoc esse cognitum quasi non existens, ...; sed sic cognitum dicetur a Deo ut iam in sua existentia visum. なお次の三例を附加する。——(1) I-II, q. 44, a. 2. Ea autem quae timorem incutiunt, non sunt simpliciter mala, sed habent quandam magnitudinem,.... tum etiam quia apprehenduntur ut de prope existentia. すぐそばに現在する（ヒクシステレ）ものとして、云々。——(2) III, q. 77, a. 8. ut scilicet agere et pati possint quidquid ageret vel pateretur substantia, si ibi praesens existeret. もしも現在ヒクシステレするとしたならば、云々。——(3) Compend. theol. c. 8, n. 568. sic autem ad ipsa fertur nostra dilectio, ut ea tanquam existentia amemus. あたかもまのあたりあるものの如くに愛する。

以上に於て我々は、エクシステレの「あらわれる」の意味について、㈠　エックスの意味の強い場合　㈡　エックスとシステレと、どちらの意味も強い場合　㈢　エックスの意味が背後に退き、システレの意味が殘る場合を考察してきたのであるが、最後に　㈣　エックスもシステレもとり立ててその意味が強くなく、どちらも一般化されてその意味が稀薄になる時、エクシステレはいかなる意味をとるかを考察しなければならない。――その答は容易であろう。すなわち、その時エクシステレは「がある」存在の意味となる。――我々は「あらわれる」の意味に卽してエクシステレの意味を順次に追求しきたり、㈢の諸例に及んだ時、その背後にになう意味の發展系列を意識しつゝそれらの用例におけるエクシステレの意味を解釋し、それを「現在する」「てもとにある」などと譯したのである。然しながらこのような意味の系列などを念頭に置かない讀者が、直接にこれらの用例を見たならば、どのように解釋するであろうか。おそらくこれらのエクシステレを「存在する」と譯すであろう。而してこの解釋はあやまりではない。というわけは、我々がこれまで系統的に探究してきたエクシステレの意味の系列は、すべて廣い意味での「存在する」ことのうちに含まれるからである。すなわち「存在する」ことは「あらわれる」ことであり、「はたらく」ことであり、「現在する」ことである。これらはすべて存在することの或樣態であつて、その樣態が特にいちぢるしく目立つ時、我々はその存在仕方を「あらわれる」とよび、或は「はたらいて居る」とよび、或は「現在して居る」という。而してこれらの樣態が特にいちぢるしくない時、それを一般的に「存在する」という。然し「存在する」といつてもその場合エクシステレの「あらわれる」とか「はたらく」とか「現在する」とかいう意味が消失したわけではない。これらの意味は何らかのかたちで殘存して「存在」の意味を構成して居るのである。すなわち最も平凡に一般化された「存在」の意味は、そのうちに殆んど認めがたいほど一般化されたかたちで「あらわれる」こと「はたらいて居る」こと「現在して居る」ことなどの意味を含んで居るのである。――このようにして我々は、エクシステレの「あらわれる」の意味の系列を追つて、またもや「存在する」の意味に到達した。

三〇

第四に、特にシステレの意味の強調されて居る場合のエクシステレについて考察する。――この時この語の意味は「立つ」とか「立つて居る」などである。エックスの意味は微弱であるから、「生成」「成立」「出現」などという起原との關係は含意されない。從つてエックスとシステレとの意味力の釣合關係の變化からこの語全體の意味に變化が生じてくるということはない。そのかわり「立つ」の意味がどのようにとられるかに應じて、意味の變化が認められる。我々はその段階を以下に次の四つに分けて論じようと思う。㈠ 文字通りの意味で「立つ」を意味する場合。㈡「立つ」がごく一般的意味にとられた場合。㈢「立つ」の意味が弱まり、何らかの意味での「立つ」ことを支える補語を必要とする場合。㈣「立つ」の意味が非常に弱まつた場合。この時エクシステレの意味は單に「である」の意味でのエッセの代用となる。以下順次にこれらの場合をトマスの用例に從つて考察する。

㈠ 文字通りの意味で「立つ」を示す場合。――このような例はきわめて少い。我々が調べた範圍内では、たゞ次の一例を認めただけである。すなわちヨハネ福音書註解第四章に、「六時には太陽は高所にエクシステレする(Sol in alto existit)。そして後はたゞ傾くばかりである」[1]云々。この場合のエクシステレは、太陽が高所に「存在する」ないし「ある」の意味にとつても間違いではない。然し「立つ」の意味にとる方が、前後の事情より見て適當である。なぜなら「傾く」(declinere) に對してエクシステレといわれて居るのであるから。この例に於てはエクシステレのエックスの意味は殆んど力を持つて居ない。

(一) In Joan. c. 4, n. 565. in sexta hora sol in alto existit, et non restat nisi ut declinet.――次の二例に於けるエクシステレも、その意味よりして「存在」よりむしろ「立つて居る」と譯した方がよさそうである。(1) In Matt. c. 2, n. 173. Stella existens in Iudea apparuit illis gentibus in oriente. ユダアにある「立つ」星が東方の人々にあらわれた。――

2) In Ioan. c. 17, n. 2258. lux autem ubique diffunditur sole existente super terram. 地上にある〔立つ〕太陽によつて（或は、太陽が地上に立つと）光が到る處にそそがれる。

次に　(二)　「立つ」ことが、もつと一般的意味で用いられる場合。――「立つ」とは、文字通りの意では、何らかの物體が自然的物理的意味で立つことである。然し一般的に用いられる場合には、單に物體的意味のみならず一般に「立つ」はたらきの本質のうちに含まれる或要素がそのうちに認められるすべてのことがらについていわれる。ところで「立つ」というはたらきの本質的特徴は、既に言及されたように二つある。一つは「目立つ」「きわ立つ」「そば立つ」などという日本語によつても示されるように、他のものから區別されて、そのもの自體として、そのものの獨自性に於てあることである。もう一つは「兩立する」「對立する」「存立する」「自立する」などという言葉によつても示されるように、他者と區別されたそのものとしてのあり方を持續することである。故に或ものとしての獨自性と持續性とが認められる場合には、たとい物體的な文字通りの意味ではなくとも、やはり廣い一般的な意味に於て「立つ」ということができる。以下にその若干例をあげる。

（a）　アリストテレス形而上學註解第十卷七講に、「對立するものは、いかなる類の對立に於ても、同時にエクシステレすることは不可能である」(二)云々。――この場合のエクシステレも、對立するものが同時に「存在する」の意味にとれないでもないが、やはりシステレの原意にもとづいて、對立するものが對立するものとして同時に「立つ」すなわち「兩立する」ことができないの意味に解する方がよい。この場合の「立つ」は勿論自然的物體的意味でのそれではなく、もつと廣い一般的意味で解されて居る。「存立する」と譯すのが適當であろう。

（b）　このような意味での「立つ」ことが、何らかの物についていわれる場合、エクシステレは「自立する」「獨立する」「自存する」などの意味でスブシステレと殆んど同義となる。それはさきに第二群の第二の場合として考察されたところの、「―から出てきて―自立して居る」の意味〔本論文第二五章註(二)・哲研四三九號・五〇頁〕から「―から

出てきて」という起原關係が消失した場合と解することができる。――たとえばニコマコス倫理學註解第十卷十講に「賢者は唯一人自分だけでエクシステレして居ても（etiam si solus secundum seipsum existat）、眞理を觀想することができる」[三]云々。またコリント前書第十二章註解に、「肢體の一つ一つがそれ自體別々にエクシステレするように（secundum se separatim existeret）」云々[四]。これらの例に於けるように、エクシステレが「それ自體別々に」とか「唯一人自分だけで」などという限定を伴つて用いられる場合、それは、そのものとして獨立に存立して居るというシステレの原意を保持し、スブシステレといゝかえることができる。

(二) In X Met. l. 6, n. 2041. Opposita enim secundum quodcumque oppositionis genus impossibile est simul existere. 類似として――(1) In X Met. l. 7, n. 2060. Sola opposita ex natura sua non contingit simul existere. ――(2) In X Met. l. 10, n. 2120. Nam ea quae non sunt opposita, possunt simul existere in eodem.

(三) In X Eth. Nic. l. 10, n. 2095. Sed non est ita de sapiente speculativo, qui potest speculari veritatem, etiam si solus secundum seipsum existat.

(四) In I Ad Cor. c. 12, n. 742. Non sic posuit membra diversa, ut unumquodque eorum secundum se separatim existeret. . . . 同じく「別々にエクシステレする」(separatim existere) の例。――(1) In IV Pol, l. 3, n. 565, Ista autem, scilicet consiliativum et iudicativum, utrum separatim existant, ut alius sit ille qui iudicat, alius sit qui consiliatur, ...

（c） さてまたこのような意味でのエクシステレは、單に何らかの物についてのみならず、また何らかの概念についてもいうことができる。その場合「立つ」とは、或概念がその概念として他の概念から區別されて「立つ」こと、すなわち「存立する」「成立する」ないし「構成されて居る」ことを示す。たゞし「成立する」とか「構成される」とかいつても、さきの第一群の(二)の場合（b）の諸用例の如く〔第二三章・哲研四三九號三七頁〕、「―から」成立つ、とか構成されるとかいうように、生成の意味を含まない。むしろ「―に於て構成されて居る、成立して居る、存

立して居る」というように、或概念がそれに於て存立して居る根據を示すのである。――たとえばニコマコス倫理學註解第四卷五講に、「けちは二つのことのうちにエクシステレする（illiberalitas in duobus existat）。すなわち〔他人に〕與えることの不足と、〔自分に〕受取ることの過剰とである」[五]云々。こゝでは「けち」という概念を分析して、それが二つの要素から成立つことをいう爲にエクシステレが用いられて居る。たゞし二つの要素「から」といつても、その要素はさきの第一群の(二)の場合（b）の如くに、何らかの原因を示すのではなくて、むしろその概念がそれに「於て」その概念として「立つ」ところの根據（ratio）を示すのである。故に二つのもの「からエクシステレする」（ex duobus existere）とはいわれずに、二つのもの「に於てエクシステレする」（in duobus existere）といわれて居る。――また分離實體論第十五章に、「認識の完全性と眞性とは、認識された事物の類似を得るという、このことのうちにエクシステレする（In hoc perfectio et veritas cognitionis existit, quod....）」[六]云々。また同所同章に、「宇宙の善は事物の秩序のうちにエクシステレする（in quo〔ordine〕bonum universi existit）」[七]云々。この二例のうちの前例は、認識の完全性と眞性とが、事物の類似を得ることのうちに「存在する」の意味ではなく、認識の完全性と眞性との概念は、事物の類似を得ることのうちに「存立する」こと、すなわち認識の完全性と眞性の概念がかゝる概念として存立する爲には、事物の類似性を得ることが必要であること、更にくだいていえば、認識が完全であり眞なるものであるといわれる爲には、認識者のうちに認識對象の類似が得られねばならぬことゝが示されて居るのである。また後の例に於ても、宇宙の善は事物の秩序のうちに「存在する」ということではなくて、宇宙の善の概念は、事物の秩序のうちに「存立する」ことが示されて居るのである。故にこれらいづれの例に於てもエクシステレは、何らかの概念が他の概念から區別されたその概念「として立つ」ことを示して居る。すなわち「立つ」ということがきわめて廣く、概念や意味の領域に擴張されて用いられて居る。このように概念や意味の存立について用いられるエクシステレは、同じくシステレから出た複合動詞コンシステレ（consistere）と殆んど同義である。[八]

(五) In IV Eth. Nic. l. 5, n. 699. Cum enim illiberalitas in duobus existat, scilicet in defectu dationis et in su perabundantia acceptionis.

(六) De Sub. Sep. c. 15, n. 133. In hoc enim perfectio et veritas cognitionis existit, quod rerum cognitarum si-militudinem habeat.

(七) De sub. sep. c. 15, n. 138. tum quia est conveniens rerum ordini, in quo bonum universi existit,....

(八) コンシステレの意味については次の用例を見よ。——(1) II Sent. d. 15, q. 3, a. 3, ob. unde non in otio, sed in operatione felicitas consistit. 幸福な閑暇ではなくはたらきのうちにコンシステレする(成立つ)。(2)——II Sent. d. 30, q. 1, a. 1. beatitudo, quae in visione Dei consistit, 至福は神を見ることのうちにコンシステレする。(3)——II Sent. d. 30, q. 1, a. 3. peccatum originale consistit in deordinatione naturae. 原罪は本性の不秩序のうちにコンシステレする。——(4) I-II, q. 114, a. 4. Sed contra. in manifesta Dei cognitione consistit vita aeterna. 神の明な認識のうちに永遠の生命はコンシステレする。——(5) II-II. q. 6, a. 1, ad 3. credere quidem in voluntate credentium consistit. 信ずることは信者の意志のうちにコンシステレする。——(6) II-II, q. 47, a. 13, ad 2. ratio fidei consistit in sola cognitione. 信仰のラチオはたゞ認識のうちにコンシステレする。——(7) II-II, q. 66, a. 3, ob. 2. furtum consistit in acceptione rei alienae. 窃盗は他人のものをとることのうちにコンシステレする。——(8) In I Periherm. l. 7, n. 4. iudicium rotionis, in quo consistit verum vel falsum. 眞偽は理性の判斷のうちにコンシステレする。——(9) In Ad Rom. c. 1, l. 8, n. 160. homicidium non solum consistit in opere sed etiam in voluntate. 殺人は單に行爲のうちのみならず、また意志のうちにもコンシステレする。——(10) In Ad Ephes. c. 4, n. 252. ira, quae consistit in accensione sanguinis. 怒りは血の上昇のうちにコンシステレする。これらの用例によつて知られるように、コンシステレは大抵「—のうちに」「—に於て」という前置詞を伴つて in aliquo consistere という形をとる。この「—のうちに」「—に於て」の意味は、存在を示すエクシステレとともに用いられる「—のうちに」「—に於て」とはことなる。たとえば——(1) I Gent. c. 53. in rerum natura existit. 實在界にエクシステレ(存在)する。——(2) De pot, q. 2, a. 1. in intellectu nostro existens. 知性のうちにエクシステレ(存在)する。——このようにエクシステレとともに用いられる「—に於て」は、それが實在界であれ觀念界であれ、そのものがそこに於て存在して居る何らかの意味での場所を示す。或はまた (3) I q. 7, a. 2. omne existens in actu. 現實的に存在する。——(4) Compend. theol, c. 216, n. 439. in potentia existit. 可能態に於て存在する。——このように「—

に於て」は、そのものがその狀態に於て存在して居るその狀態を示す。ところがコンシステレとともに用いられる「—に於て」の意味はそのいづれでもない。たとえばコンシステレの用例(2)の、「至福は神を見ることのうちにコンシステレする」というのをとつて見ると、至福が神を見ることを何らかの場所として、そこに存在するの意味ではない。また神を見るという狀態のうちに存在するの意味でもない。用例(6)の「信仰のラチオは單なる認識のうちにコンシステレする」も同樣であつて、それは信仰のラチオが認識という場所に於て存在することではなく、また認識という狀態に於て存在するの意味でもない。そうではなくて、コンシステレとともに用いられる「—に於て」は、そのものの概念や意味が、それに於て構成されるものを示す。すなわちそのものの概念がこれこれの限定のもとに、その概念として「立つ」ところのその限定を示す。たとえば(2)至福の概念は神を見るということに「成立つ」のであり、至福の意味は神を見ることに外ならぬ。(6)信仰の概念は認識のうちに「成立つ」のであり、信仰は何らかの認識に外ならぬ。他の諸用例も大ていこのような意味で「—に於て成立つ」と譯される。——ところで本章の（c）項にあげられたエクシステレの諸例〔本章註(五)—(七)〕は、この語としては珍らしい用例であつて、「存在する」よりむしろ「—に於て成立つ」を意味する。故にこれらの例に於ける「—に於て」も、存在の場所や狀態ではなく、その概念や意味が「それに於て」成立する限定を示すことは本文に述べられた如くである。

（未完）

（筆者　大阪市立大學文學部〔哲學〕助教授）

前號目次

ヘーゲル哲學の體系と性格……武市健人
—「有—無—成」と價値論との
辯證法についての再論—
聖トマスに於ける esse と
existere について（承前）……山田晶
—existere の意味の探究・第四、トマスの用法—

新着外國雜誌所載論文一覽